

歴史の多元性と動態性に着目した世界史構成論

—東アジア世界史を事例として—

A Theory of Framework for “World History” Curriculum
Based on Plural Perspectives and Dynamism in History

乗田 政長
(大阪府立平野高等学校)

1. 研究の目的

従来、高等学校「世界史」の教育内容については、様々な角度から批判が寄せられてきた。そのうち、生徒達に与える歴史認識の問題では、以下の五つが主なものとなっている。(1) 西洋中心主義に陥っている。(2) 日本史が世界史の中に位置づかず、特殊なものとして記憶されてしまう。(3) アジアの歴史は、中国史がそのほとんどをカバーしており、周辺地域はその関係においてのみ登場する。(4) ウェスタンインパクトによって代表されるように、「近代」とは、西洋諸国がアジアを統合していく過程であるとする見方。(5) いわゆる周辺地域と呼ばれる国々の歴史的な役割や、従属の過程がダイナミックに描かれていない。その結果、大国と小国という言葉の中に潜むネガティブなイメージがそのままに残されている、などである。

こうした問題点を解決するために、今までにも多くの試みがなされてきた。いわゆる「文化圏学習」や、ヨーロッパ勢力による世界の「統合」を19世紀に置く試みなど、世界史の構成を改良することで、そうした問題の除去に取り組んできたわけであるが、根本的な問題の解決に至っていないのは周知の通りである。¹⁾

あるいはまた、こうした伝統的な縦割りの区分を見直して、「文化交流圏」を仲立ちに地理的な周辺領域や、文化的にマージナルな存在をクローズアップすることによって、新しい授業の試みを提案している研究も多くなってきた。²⁾ しかし、こうした試みは、授業の実際的な活用といったことにおいて、一定の成果を得ているものの、直接

世界史の構成に結びついてはいない。

こうしたことから、筆者は以前に、A.G.Frankらの世界システム理論を手がかりに、世界史構成の試案について発表した。³⁾ 図1がそれにあたるが、イスラム史家として名高いHodgsonや、ヘゲモニー理論の西川吉光らの研究も加味して、近代の特殊性と西洋中心主義とを相対化することを目的にしている。世界の一体化を、近代化という価値的な表現ではなく、交流の粗密で表し、近代以前から一体化したのものとして世界を扱うことで、「世界」を主役にした構成となっている。また、

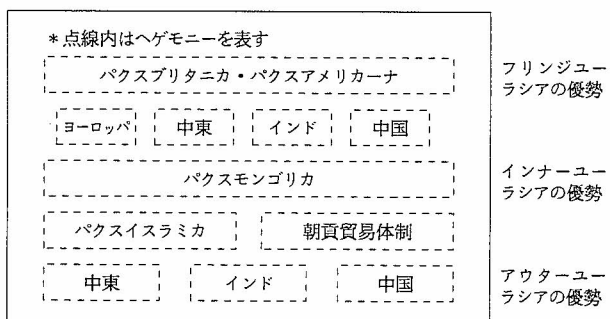
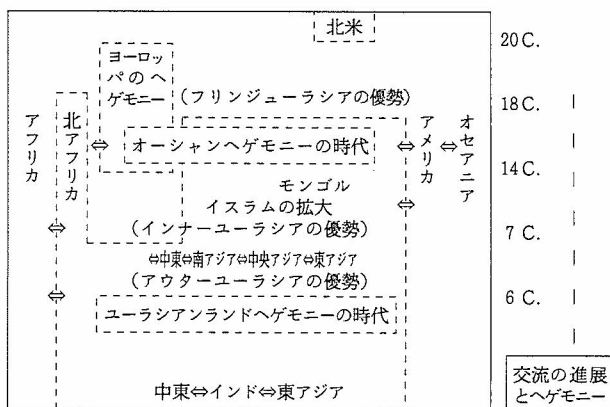


図1 世界史構成概念図

ヘゲモニーの中心拠点がこの「世界」の中を移動することによって、歴史展開に支配と被支配というダイナミックな力関係が表現されている。このことが、さらに、中核地域、半辺境地域、辺境地域という三つの視点を確保することにもつながり、世界をより奥行きをもって眺めることが可能となっているのである。

ヘゲモニー拠点は、アフロ・ユーラシア複合体⁴⁾の中を移動しながら、内陸部から海洋部へと変遷し、現代世界へと受け継がれていく中で、従来の陸地からの視点のみならず、海からの視点をも導入することができるのである。⁵⁾

今回の研究の目的は、このモデルをさらに完成させるため、東アジア世界を例にとり、具体的な世界史構成を開発することにある。

2. 東アジアの世界史構成理論

図2は、今までの伝統的な東アジアの世界史構成を図式化したものである。この中で示されているのは、中国史のしかも王朝名中心の縦割り学習である。東アジアとは、とりもなおさず中国を中心とした領域であり、周辺地域は中国文明の恩恵を受けながら発展しているとする認識を与える。また、北方遊牧帝国などは、中原の文明を破壊、もしくは征服する野蛮な民族として位置づけられるか、中原を支配下に置くことで自ら中国化＝文明化していく客体として描かれている。⁶⁾

	中国	モンゴル チベット	朝鮮半島	日本
BC	殷			
↑	周			
7C	春秋			
	戦国	匈奴		
2C	秦			
0	前漢			
1C	後漢	鮮卑		
	晋		三韓	倭
5C	南北朝		高句麗・百済・新羅	大和政権
6C	隋	突厥		
7C	唐	ウイグル	新羅・渤海	奈良政権
10C	五代十国		高麗	平安政権
11C	宋	遼		
12C	金・南宋	西夏		鎌倉政権
13C	元			
14C	明		李氏朝鮮	室町政権
17C	清	タタール		江戸政権
↓				
AD				

図2 伝統的な東アジア史構成

また、朝鮮半島部や沿海州、ベトナムやチベットも中国文明をただ受容するだけの客体的なものとして扱われ、それらと本来同様の立場であるべき日本は、あたかも別の世界として特別に学習されることとなる。ここに日本史が世界史の中に位置付かず、特別、特殊なものであるかのような歴史学習へと陥っていく最大の原因がある。

こうしたことを踏まえて、以下、諸点に注意しながら、具体的な歴史構成の理論を考究していくこととする。

(1) 国家領域の見直し

二谷貞夫は、「前近代の日本の歴史は、日本列島のいくつかの地域住民の独自の社会と文化および民族の形成過程をもったという仮説的な方法をとることである。」⁷⁾と述べているが、東日本や西日本、北日本や南西諸島などといった地域的な違いを念頭に、近代日本の成立を考えることは、日本史学習において特に重要である。同様なことは、中国や朝鮮半島、オホーツク海周辺やシナ海地域など、東アジア全般にわたっても言える。例えば、中国の国境領域が現在のものに近づいたのは、ほぼ清王朝中期以降のことであり、チベットや中国東北部、台湾などは、それまで中国中央部の政権とは異なる独自の歴史を歩んでいるのである。シナ海や日本海地域には、村井章介によって明らかにされた倭寇集団の独自の世界が展開していた⁸⁾し、ほぼ同じ時期に「北の倭寇」⁹⁾というべき集団の活動が、日本海北部からオホーツク海にかけて活発化していたとする研究もある。こうした地域や海域では、自分たちがどの国家に属しているかというような明確な自己認識は存在せず、むしろ多元的境界的な領域としてあり、歴史学習においても従来見落とされてきた。

こうした周辺領域はいつどのように一つの国家に吸収されてきたのであろうか。表1にまとめてみた。

四川や雲南は、比較的早い時期に中国中部の政権の枠の中に入ったものの、漢民族による移住はかなり遅く、山岳部に居住する少数民族の民族的なアイデンティティもそのころに確立されたという意味では、¹⁰⁾本来別に扱う必要があろう。また、新疆地域は清王朝中期に、圧倒的軍力で支配下

表1 中国及び日本への帰属

大陸諸地域	時代	列島諸地域	時代
四川 雲南	明～清	九州南部	奈良～
チベット	清	東北地方	平安～
台湾	清	対馬	江戸
中国東北部	清	北海道	明治
		沖縄	明治

に編入され、その後の歴史展開の中で、世界史の辺境という立場に陥っていった¹¹⁾ことを考えれば、決して単純に中国国家の一員として歴史の流れの中に共存してきた訳ではない。また、中国東北部や北方遊牧地域は、伝統的な中国史の枠内では扱われず、外部勢力として常に中国中央部の政権と対立するものとして描かれてきた。¹²⁾しかし、清王朝や元王朝まで待たずとも、すでに北魏や隋、唐帝国などは、これら北方遊牧民族の直接の流れを汲む国家であったことは明らかであり、従来の農耕文明＝中国文明という構図からの歴史構成の脱皮が急がれるのである。

(2) 海域圏の設定

以上のことから、現在の国家領域の設定を見直して、ある程度のまとまりを持った地域圏や海域圏の創出が必要とされる。しかも、これらの領域は、それぞれの時代に依じて、王朝や国家が異なる領域を版図に収めながら消長をくり返していることを表すものでなくてはならない。

こういったことを背景に、次のような地域を設定する。(1) 東アジア (2) 北アジア (3) 環南シナ海 (4) 環東シナ海 (5) 環日本海 (6) 環オホーツク海、がそれである。¹³⁾ (1) と (2) は、単純に地理的に南北を区分したものであり、文化的には農耕を主とした地域と、遊牧や狩猟を主とした地域を念頭に置いている。ただ、両者が従来のように、対立的に捉えられるのではなく、両地域にまたがって各王朝が成立、移動、征服と

いった歴史展開が位置づける必要がある。いわば、相互補完的に中華文明を築き上げていった主体であるとする見方である。また、(3)～(6)の海域圏は、濱下武志のモデルを参考にした海域区分である。これら海域は、文化的、政治的にマージナルな領域であり、冊封体制¹⁴⁾の強弱と連動して、歴史上に特有の姿を現すものである。と同時に、ヘゲモニー拠点の変遷を示すカギにもなるが、陸上から海上へとシステムが変換していく過程がこれによって明らかにされる。加えて、従来の内陸中心の歴史観を改めて、海からの視点を導入することともなるのである。

(3) 世界システム理論の応用

従来から、東アジアの国際関係を秩序づけるものとして、西嶋定生の冊封体制理論や濱下の朝貢交易体制理論がクローズアップされ、¹⁵⁾実際に授業モデルなども開発されてきた。¹⁶⁾また、高等学校「世界史」の教科書にも、最近では記述されるようになってきている。¹⁷⁾ここでは、これを世界システムの一部、すなわちサブ・システムとして扱い、世界史構成に利用することを提案する。冊封という概念は、どちらかという政治的なものであり、朝貢は経済的な部面で用いられることが多いが、Wallersteinの言うように、世界システムは、こうした政治、経済の各領域をクロス・オーバーした概念であると同時に、¹⁸⁾富の集積の道筋をいろいろな側面から説明するところに意味がある。また、Frankも、世界システムの概念そのものを拡張することを訴えており、¹⁹⁾冒頭で紹介した筆者のモデルも、覇権移動というところその手がかりをつかんでいる。

以上のような意味から、この冊封・朝貢交易体制(以後、古厩の説を用い「冊封システム」と記述する)²⁰⁾をそのまま、システムの中核＝辺境＝半辺境というモデルに当てはめ、それぞれの領域の消長や移動の状態を考慮に入れながら、具体的な世界史構成のモデルに繋げていくという手順をとる。

東アジアの中核地域をどこに置くかということについては、黄河流域から長江流域にあたる地域を中心にするだけでほぼ一致するであろう。清や元など、いわゆる征服王朝も、この地域を政治基

盤に、周辺諸国、諸地域に号令したことは明らかである。

それでは、辺境地域はどこになるのか。これは、当然中核との政治的、経済的關係によって変化する訳であるから、基本的に、現在の国家領域においてその属領となっている地域、さらに領土的にはいくつかの国家の支配の変遷を受けながら、従属の度合いを強めていった地域、時代によって半辺境から辺境の立場に変転していった地域などがあげられる。例えば、朝鮮半島地域は、歴史的にほぼ全時代を通じて半辺境の立場であったが、明治から大正期の日本帝国による侵略・支配の結果辺境化していったと見ることができる。逆に日本は、そのほとんどが半辺境の位置にありながら、近代に入って中核の座を中国と争い、東アジア世界の唯一の盟主として、冊封システムに代わる植民地主義の導入によってこれを実現しようとしたと捉えることができる。

また、半辺境と中核の間、すなわち辺境地域に本来位置しながらも、中核地域や半辺境地域の力の低下に伴い、独自の文化を現出したり、交易によって一挙に繁栄の極に達したりした地域²¹⁾もある。こうした地域は、東アジア地域では、もっぱら日本と中国に挟まれた海域を中心とする領域があげられるが、歴史の進展に伴い、これらが独自の位置を占め、尚かつ隣接する大国によって支配・従属させられていく過程が世界史構成の中に位置づけることが重要である。対馬や琉球、サハリンや台湾など、倭寇や海賊といった両属的集団の拠点として歴史の舞台に登場させることによって、今までとは異なる視点、大国中心でもない、従属国からのそれでもない、第三の視点が確保できることとなるのである。²²⁾

(4) 東アジアの外部世界

東アジア地域をどこからどこまで指すのかという問いについて、明確な答えを出すことはできない。ここで言う東アジアという表現は、世界の一体化の中で捉えたものであり、もし、明確に東アジアの領域を確定したなら、文化圏学習と同じ弊を生み出すからである。²³⁾ あくまでここで扱っている領域は、広くユーラシア大陸にまで及び、Hodgsonがアフロ・ユーラシア複合体と名付け

たものの一角にすぎないという意味であり、時代により変化するものだからである。強いて言うならば、漢字や儒教など、中華文明と従来呼び慣らわしてきているいくつかの特徴をもつ領域というほどの意味で用いている。²⁴⁾

東アジアと北アジアを分けた基準は、その地理的な違いを表すものであって、農耕世界と遊牧世界といった生活の違いを意識したものである。ところが、従来、農耕文明＝中華文明＝文明の中心、遊牧世界＝辺境地域＝野蛮な地域といった対立的な東アジア世界史像が横行してきた結果、先述したような様々な問題²⁵⁾が取り残されてきたのである。ここで表現しようとしているのは、広く中華文明と呼びうるものは、遊牧地域と農耕地域との共存や軋轢の中から生み出されたものであるということと、両者はけっして対立的なものではなく、相互補完的な関係にあるということなのである。

さらに、北アジア地域は、内陸ルートによってむしろ歴史的にイスラム圏やヨーロッパとの結びつきが強く、東アジア地域も、南部臨海地域と北京を中心とする地域とでは、異なる文化と経済によって支えられてきた地域であるという見方が優勢なのである。²⁶⁾ しかも、この南部臨海地域こそは、東シナ海域や南シナ海域を通じて、東南アジア、インド地域に直接つながっているのである。²⁷⁾

こうしたことから、東アジアの外部世界とここでいう東アジア世界との接点にあたる部分は重複したり、時代によって変化したりする不安定なものであるということが分かる。冊封システムが、この領域でのヘゲモニーの範囲を表すのと同じく、周辺地域ではイスラム共同体にも同時に所属しており、この重なった地域をどちらかに分離することはできないのである。

しかし、ヘゲモニーの中心とそこからの距離とが、時代によって変化すると連動して、この両属的部分が、歴史上に特有な姿を表す点にむしろ注目したいのである。先に示した四つの海域も、同様の意図で設定している。

以上のことから、東アジアの領域について確定できないのと同じく、その外部世界も確定するこ

とはできない。ただ、歴史を通じて、一つのまとまりを形成する領域的に弾力的なエリアとして、インドを中心とする世界、西アジアを中心とする世界などが存在し、ここで言う東アジア世界も、それらの一つであるということである。²⁸⁾しかし、あくまでもエリア同士は相互可侵的、弾力的なものであり、アフロ・ユーラシア複合体のそれぞれのパートに過ぎない。

(5) ヘゲモニーの消長

以上のような歴史学上の成果に基づいて、小中華世界としての半辺境国家による支配領域と、中核部である中華世界との関係、また海域部を中心とする辺境地域の力関係を概念化したのが図3である。

紀元2世紀の段階では、中華世界としての中核部は中国中部と北中国に形成されており、周辺には小中華世界はまだ誕生していない。5世紀になると、朝鮮半島や日本列島に中国との冊封関係を拠り所にした政権が誕生してくる。これらは8世紀には支配領域を広げ、国家体制を中国の政権を

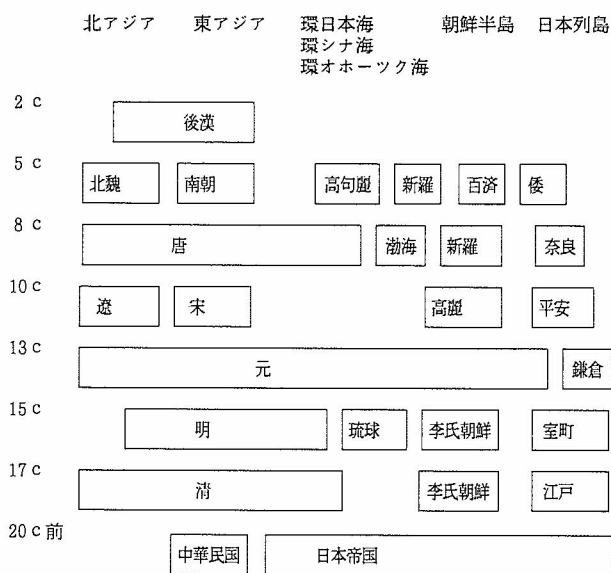


図3 冊封システム内のヘゲモニーの消長

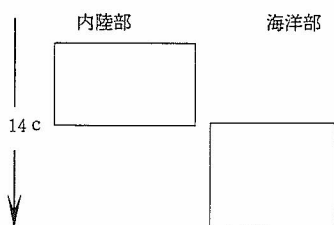


図4 ヘゲモニーの変遷

まねて完成させる。しかし、唐という国際的ヘゲモニー国家によって冊封システムにつなぎ止められ、日本の政権のみがややこれと一線を画している。

10世紀には再び中核部の政治的影響力が失われ、朝鮮半島には高麗が、日本には平安政権が独自の文化を創造しようとしている。次の13世紀は元の時代である。ユーラシア大陸に広く号令し、その威令は北海道にも及び、しばしばアイヌと交戦するに至っている。²⁹⁾また、鎌倉政権は東北地方に支配の手を広げてきている。³⁰⁾

15世紀には明が海洋部に進出し、その前後に活発となった倭寇勢力を一掃することに努力する。また李氏朝鮮や室町政権は、明の冊封システムを受け入れながら、独自の国家発展を目指している。17世紀になると、海域部の独自性や両属的性格は失われ、清、李朝、江戸幕府といった、近代以後の国家領域を完成させる国々によって牛耳られてしまう。薩摩や松前を通じて、琉球や北海道が日本政権の辺境として位置づけられるのもこの時からである。

20世紀には、こうしたアジアの伝統的な諸国家は、ほとんど日本帝国によって従属させられていくこととなる。この時期には、中国を中心とした冊封システムに代わって、欧米勢力が持ち込んだ自由貿易体制が東アジアを席卷することとなり、日本帝国はいわばその先兵として既存の冊封システムを打ち壊す主体となったと考えられる。これ以後の時期を古厩は「日本植民地システム」の時代³¹⁾としているが、後述するように20世紀前半をこの概念で説明する。

(6) ヘゲモニーの変遷

図4は、東アジアにおけるヘゲモニー中心領域の変遷を示したものである。14世紀のモンゴル支配の終了とともに、ヘゲモニーの中心拠点が内陸部から海洋部へと変化したことを表している。それに伴って、世界大の交易網が海洋部へ移動する。海域部がオホーツク海から日本海、シナ海、インド洋へとつながり、その道筋を通してイスラムやヨーロッパの商人が商業上の利益を欲して争うこととなるのである。

しかし、最終的にヨーロッパ勢力が持ち込んだ

自由貿易体制によって、東アジア地域の伝統的な冊封システムが取って代わられることにより、東アジアでのサブ・システムは、他地域のシステムに同化せざるを得なくなる。その鍵を握ったのが日本帝国の膨張であると考えられる。

3. 東アジア世界史構成モデル

以上のような理論的前提に基づいて、東アジアの世界史構成のモデルを開発する。図5の最上部左側に示されているものは地理的な区分である。北アジアには、西域やチベットは含まれていない。また、東アジアは概ね中国中部を表しているが、南部の臨海地域は海域部に重なっており、海域部の中には朝鮮半島や日本列島も含まれている。右端の関係・特色は、この時代の特徴点や指導上の留意点、それぞれの地理区分相互の関係について記したものである。

まず、漢代に初期冊封関係として特徴づけられる東アジア世界は、黄河流域の政権と北方遊牧地帯との力関係から、一つの中核部分を形成していく。周辺に位置する倭などは、国内の勢力争いに勝ち抜くために、進んで冊封を受け入れ、この体制内に編成されていった。以来、中核部分は基本的に北アジアと中国中部との間を複合的に行き来し、ヘゲモニーの中心拠点として14世紀頃まで変わらない。ただし、その中心領域の地理的大きさや、中心部の微妙な移動は、時代とともに変化していく。

これらヘゲモニーの変化は、13世紀から14世紀にかけての元王朝の衰退と東アジア全般の混乱の後に現れる。東西の交易路は、内陸部から海域部へと大きく変化し、それに伴いヘゲモニー拠点の移動も行われた。³²⁾ 交易比重の変化に伴い、北アジアや内陸アジアの世界経済上の重要性が衰え、代わって、インド洋や南シナ海にそれが移っていく。図の中の実線枠は、そうしたヘゲモニー領域の変化を概念的に表したものである。その交易の形態を示すものとして、() の中に主なルートを入れている。³³⁾

長安や洛陽を起点に、内陸貿易がユーラシア中央部へと広がっていたネットワークが、元王朝期前後より、北京經由北方遊牧ルートへとシフトし、

同時に中国臨海部經由、インド洋交易の活発化と並行して、世界規模の交流が一気に加速化している。

それまでの時期の海域部は、基本的に半辺境と辺境を含み、中核部の文化的、政治的影響を受けながらも、独自の歴史展開を演じており、しかも相互に対立、抗争をくり返している。中核部の力を利用することで、この地域の支配政権が確定し、中核部の力が弱体化すると共に、政権の変化が生じる。台湾や琉球など海域部では、こうした半辺境国家と、中核地域の強化された時期は逆に辺境化し、弱体化していく中でこれらの支配領域に組み込まれていく。

例えば、元から明への混乱期と、日本での南北朝動乱期に、琉球地域がにわかに活況を呈し、室町時代後期の日本政権の弱体化と連動して、この地域の大交易時代がやってくる。³⁴⁾ また逆に、清

	(北アジア)	(東アジア)	(海域部)	〈関係・特色〉
2 c	奴 (内陸交易)	漢 黄河～遊牧地域	倭	初期冊封関係
4 c		五胡十六国	百濟・新羅・高句麗・倭	中核地域の分裂と半辺境国家の成立
8 c	ウイグル (内陸交易)	唐 長安～西域	渤海・新羅・日本	対立抗争と、日本の小中華化 ①
	西夏 遼 宋		ベトナム 高麗 日本	中核地域の分裂 ②
13 c		元 (内陸交易 大都～遊牧地域)		ヘゲモニー拠点の一元化と、元のオホーツク進出
14 c		元の混乱	倭寇の活動 (海上交易の進展)	元、高麗、日本の混乱と海域部の自立
15 c		明 (ヘゲモニーの移動)	琉球 李朝 日本 (環南・東シナ海交易)	琉球の繁栄とヘゲモニーの移動
16 c		明の混乱 後期倭寇 (広州～台湾～長崎 琉球～薩摩 オホーツク～松前)	日本侵略	中核地域の混乱と海域部の繁栄 混乱から抜け出した半辺境日本の、中核システムへの挑戦
17 c		清	ロシア 李朝 日本 (交易にヨーロッパ勢力が参加)	中核地域の安定と海域部の再編成
18 c				伝統的冊封体制と、ヨーロッパ型自由貿易体制の対立
19～20 c 初頭			ヨーロッパ勢力 日本帝国	冊封体制の消滅と半辺境日本の中核参入

図5 東アジア史構成モデル

王朝や徳川幕府、李王朝の政権が強化整備された時には、琉球は薩摩藩の植民地支配を受ける事になり、明治政府の成立と共に、北海道が日本に編入されていくのである。

最後の、19世紀から20世紀にかけての時代は、東アジアでの主流となる世界システムが大きく変化することで特徴づけられる。³⁵⁾ それまでの冊封システムに代わって、ヨーロッパを起点にした資本主義的自由貿易体制がこの地域全域を覆い、ヘゲモニーの中心も、内陸から海洋へと移行する。今までの辺境地域であった太平洋を經由して、近代国家形成競争システムが大陸へと押し寄せ、その先兵として、日本は中核の座を占めようと、朝鮮や台湾、北海道や沖縄など半辺境、辺境地域をその植民地に押さえ、従来のシステムを軍力によって打ち壊していく。この変化の中で、今までの辺境領域である太平洋は、一気に中核部分を東西で結びつける結節点となる。すなわち、西の日本帝国と、東のアメリカ合衆国である。第二次世界大戦は、これら二つの中核国家の争いと見る事ができる。

4. 東アジア史単元構成モデル

最後に、前述の構成モデルに基づき単元構成のモデルを提示する。次頁の表2がそれであるが、大きく第1部と第2部とに分けてある。これは、前半の内陸部にヘゲモニーの中心拠点があった時期と、それが海洋部へと移動した時期とに明確に分ける意図を持っている。

第一章は、黄河と長江流域に出現した古代文明についての章であるが、ここでは後の中華世界成立の萌芽を感じさせることをねらいにする。第二章では、東アジア・サブ・システムの中核部を形成することになる中国中部農耕地帯と、北部遊牧地帯との力関係が実は相互補完的なものであり、これら二つの複合化されたものが、第1部の歴史展開の原動力となることを理解させる目的がある。またそれとともに、海域部を中心として進んで冊封システムを受け入れようとする朝鮮半島、日本列島の国も登場する。

第三章は、中核部の対立抗争の激化、すなわち弱体化に伴って、海域部での国家形成が進む過程

を捉えさせる。特に、朝鮮半島の三国と日本列島の倭政権とが、同じように中国の影響を受けながら国家支配を強めていくことに主眼が置かれる。

第四章は、逆に中核部が強大となり、周辺地域に大きく影響力を増す時期である。新羅や渤海、日本列島に出現した日本政権は、唐との関係を深めながらも自立した小中華世界を現出しようとする過程において、一定の距離を保っている。そうした過程において、中核=半辺境=辺境という構図がはっきりしてくる。沿海州北部のツングース系諸部族は、ウイグルや渤海との力関係の中から辺境化され、日本列島東北地方は、日本政権との関係からこれも辺境化されていく。

第五章は、再び中核部が混乱する中で、連動するかのように高麗王朝の誕生や日本での武士による政権の登場を描いている。ここでは、半辺境国家が支配の領域を辺境部分に拡大し、小中華世界をさらに揺るぎないものにするため、文化的な努力を行ったり、朝廷の華夷秩序を利用しながら武家支配を正当化させていく努力のあとを考えさせることをねらいとしている。前者の例として高麗大蔵経の編纂があげられるであろうし、後者は鎌倉政権と京都政権との緊張関係、また東北地方への鎌倉武士の進出があげられよう。

第六章は、モンゴル勢力による大陸支配が、東アジアの伝統的な冊封システムを呑み込んでしまう時期として描かれる。東アジア一円を内藩国として組織しようという元の意図が、ベトナムや日本、オホーツク海周辺で挫折し、その後急速に求心力を失っていく過程を、チャガタイやキプチャクなど、他のモンゴル征服国家と関連させて考えるとともに、北海道を中心とした北方世界の独自の動きにも注目させることをねらいとしている。

次の第2部は、海洋にヘゲモニーの中心が移動する時代である。第7章は、強大なモンゴル支配による混乱と、それに対する抵抗の結果、半辺境国家群の政治権力に乱れが生じ、これら小中華世界に閉じこめられていた辺境の領域が活発に動き出す時期として捉えている。高麗は末期の混乱時代を迎え、日本では南北朝時代を挟んだ激動の時代へと突入する。その前後では倭寇の活動が活発化し、日本の東北地方を中心にして北海道アイヌ

表2 東アジア史単元構成モデル

第1部	内陸部を中心とした世界
第一章	古代文明（黄河文明、長江文明）
第二章	遊牧国家と農耕国家との拮抗
1.	中核部の成立（秦、漢）
2.	初期冊封システムの成立
第三章	中核部の衰退と周辺での国家建設
1.	三国時代から南北朝へ
2.	半辺境国家の対立 （百済・新羅・高句麗・倭）
第四章	冊封システムの発展
1.	随・唐とウイグル
2.	小中華世界と辺境の支配
第五章	中核部の分裂
1.	遼と宋
2.	高麗と鎌倉政府
第六章	世界帝国元の支配
1.	元の大陸支配
2.	海域部での抵抗
第2部	海洋を中心とした世界
第七章	元の衰退と小中華世界の混乱
1.	元の衰退
2.	小中華国家の弱体化と倭寇の活動
第八章	新しい冊封システム
1.	明と海禁政策
2.	琉球・李朝・室町政権
第九章	冊封システムの混乱
1.	後期倭寇と明
2.	日本の戦国時代と明への挑戦
第十章	世界交易と鎖国体制
1.	ヨーロッパ勢力の交易
2.	鎖国体制と管理交易
3.	港市と領域国家
第十一章	冊封システム対近代国家形成競合システム
1.	欧米の開国要求と東アジアの対応
2.	日本の開国と冊封システムへの挑戦
第十二章	日本植民地システムの時代

と連携する動きも観測される。ヘゲモニーの消長によって、国家領域が弾力的に伸縮し、その狭間で辺境地帯が活発化することを考えさせることがこの章のねらいである。

第八章は、明の出現によって、海禁政策という名の下に新しい冊封システムが打ち立てられていく時期を描く。その中心の一つになるのが琉球である。李氏朝鮮や室町幕府と肩を並べる小中華世

界を目指して、琉球は海上交易によって大発展を遂げる。システムの中での、辺境や半辺境といった立場の可変性をここでは考えさせたい。それと同時に、明を盟主としたシステムの枠の中にありながら、自立した小中華世界を模索しようとした室町政権を、世界史のレベルで位置づけることも可能であろう。

第九章は、中核部の変動と日本における混乱、その後の日本の朝鮮出兵を扱う。これは、小中華世界としての日本の弱体化（天皇や将軍といった伝統的権威の失墜）の後、豊臣氏による再統一によって、一時的にせよ冊封システムの盟主に日本が挑戦した時期と捉えることができる。半辺境国家が中核の座をねらい失敗した事例として考えさせたい。

第十章は、中核＝半辺境＝辺境といった冊封システムが再び機能しだすが、日本をはじめ小中華化がさらに進み、お互い同士のつながりは外交的儀礼にのみ限られていく時期と見られる。そうした中で鎖国体制が採られていくのである。琉球や北海道といった両属的地域は、しだいにこの小中華世界に取り込まれていき、海域の交易はもっぱらポルトガル、オランダをはじめとするヨーロッパ勢力に牛耳られるようになる。海上交易は、南シナ海やインド洋周辺においては、ヨーロッパ勢力による港市獲得戦争という特色を持つが、³⁶⁾ 環日本海、環シナ海周辺では厳格な国家管理により行われる。これが鎖国体制につながっていくのであるが、自由貿易を標榜するヨーロッパのシステムと、冊封システムとの併存した状態としてこの時代を捉えさせることをねらいとする。

第十一章は、冊封システムが自由貿易の名の下に、近代国家形成競合システムに呑み込まれていく過程を捉えさせることをねらいとする。その先兵としての日本の役割が、いち早くこの新しいシステムに自らを同化改変させていくことによって、半辺境の位置から中核へ駆け上がろうとする努力の現れであることを理解させる。李氏朝鮮や清に対する日本の要求と、伝統的な冊封システムの理念からくるこれらの国々の日本に対する要求とを対比させることによって、二つのシステムの違いが明らかにされる。その結果、この後の大陸

における日本と欧米との対立、戦争へと歴史をつなげていくことができる。最後の第十二章は、日本植民地システムというサブ・システムが、その中に多くの矛盾をはらみつつ、戦争によって崩壊していくところを描いていく。

5 おわりに

ここでは、東アジアの新しい世界史の構成原理について、一つの提案を行った。その中で、東アジア世界は、多くの海域や地域の集合体であり、決して近代的国家の枠にのみとらえられるものではないこと、冊封システムによってこれらは有機的に結びあっていること、その中では支配と被支配のダイナミズムが貫徹していること、中国史においては、遊牧地域と農耕地域とが相互補完的に文化を築き上げていったこと、琉球や北海道、オホーツク海域など、マージナルな領域も、独特の文化と歴史を発展させていたことなど、多くの点を明らかにした。これに付随した、具体的な授業案の作成が今後の課題として残るが、日々の授業実践の中で考究していきたい。多くのご意見やご批判を期待するところである。

〈注〉

- 1) 拙稿、「多元的価値に基づいた『世界史』構成の開発」社会系教科教育学研究，第8号，1996年参照。
- 2) 原田智仁「探求的歴史授業の教材開発—『7・8世紀の東アジアと日本』—」社会科研究，第38号，1990年。
同，「文化交流圏としてのサハラ—新しい世界史学習の構想—」社会科教育研究，第62号1990年。
- 3) 拙稿，前掲論文。
- 4) Afro-Eurasian Complex (in: M.G.S.Hodgson, Rethinking World History, Cambridge University Press, New York, 1993.)
- 5) 従来の陸地からの視点だけではなく、海洋からの視点の導入が声高に叫ばれている。例えば、川勝平太編『海から見た歴史』藤原書店，1996年。星村平和『いまなぜ新しい史観か』明治図書，1997年参照。
- 6) 杉山正明『遊牧民から見た世界史』日本経済新聞社，1997年，p32.参照。
- 7) 二谷貞夫「歴史教育の課題としての東アジア史像」(『環日本海叢書3，東北アジア史の再発見』古厩忠夫編，有信堂，1994年，p.73)
- 8) 村井章介「倭寇の多民族性をめぐって—国家と地域の視点から」(『中世後期における東アジアの国際関係』大隅・村井編，山川出版社，1997年。pp.29-66)
- 9) 中村和之「十三～十六世紀の環日本海地域とアイヌ」(同書，pp.145-178)
- 10) 民族的アイデンティティの形成は、本来他民族との混住や葛藤の中で形成される。漢民族の移住が四川や中国東北部に及んだのは、十八世紀以降のことである。例えば、江夏由樹「清末・旧奉天省における地主制の再編成—官荘地等の払い下げ問題との関わりから」，山田賢「中国移住民社会における地域秩序の形成—四川省・18～20世紀」(ともに『アジア史からの問い』史学会編，山川出版社，1991年所収)参照。
- 11) 茂木敏夫「中華世界の『近代』的変容—清末の辺境支配」(『アジアから考える2・地域システム』溝口，濱下ら編，東京大学出版会，1993年，pp.269-299)参照。
- 12) 杉山正明は、民族や国家といった近代的概念を前近代にまで持ち込むことによって、こうした対抗図が形成されることを示唆している。「遊牧帝国」というものも、その中には当然農耕民も、商業民も含まれるのである。(杉山，前掲書，pp.26-32)参照。
- 13) 濱下武志「歴史研究と地域研究」(『地域史とは何か』濱下，辛島編，山川出版社，1997年，pp.16-52)参照。また、「環日本海」という表現について、特に韓国の研究者からの批判は承知しているが、古厩忠夫の説を用い、マテオ・リッチの『坤輿万国地図』の表記に準じている。(古厩編，前掲書)
- 14) 西嶋定生『邪馬台国と倭国』吉川弘文館，1994年。
- 15) 他に、濱下武志「東アジアの朝貢貿易と琉球大交易時代」(『南海の王国 琉球の世紀—東アジアの中の琉球』角川選書，1993年，pp.47-

- 64) 参照。
- 16) 中学校での歴史授業例として、『歴史授業のワールド化』星村，原田編，明治図書，1996年，がある。
- 17) 例えば，平成10年度版『新世界史A』清水書院などがあげられる。
- 18) I.Wallerstein『近代世界システムⅠ』川北稔訳，岩波現代選書，1981年，p.16，参照。
- 19) A.G.Frank and B.K.Gills, *The World System*, Routledge, New York, 1993.
- 20) 古厩忠夫は，19～20世紀の東アジアを，それ以前の「冊封関係システム」と対比しながら「近代国家形成競争システム」の時代とし，その後の日本帝国の植民地支配の時期を，「日本植民地システム」と捉えている。古厩忠夫「環日本海地域の歴史像 歴史認識の共有空間拡大のために」（古厩編，前掲書，pp.3-26）
- 21) 後に述べる琉球地域や，対馬を中心とした海域部がそれにあたる。
- 22) 例えば，社会学者の橋爪大三郎は，世界像を深く理解するためには，三つの視点が必要であるとす。竹田青嗣，橋爪大三郎『自分を活かす思想 社会を生きる思想』径書房，1994年，pp.154-155。
- 23) これでは，縦割り学習の改善につながらない。
- 24) 従来，漢字文化圏と呼んでいるのも，これに当たる。
- 25) 大林太良は，中国を，中国本部，モンゴル，中国東北部，チベット，新疆に分けたが，ここではより単純化し，チベットや新疆は一応除外して考えている。大林太良，生田滋『東アジア民族の興亡』日本経済新聞社，1997年，pp.19-23。
- 26) 同書，pp.44-45参照。
- 27) ダウ船を改造したジャンク船の活動がそれを物語る。
- 28) ここでは，Abu-Lughod のモデルを念頭に置いている。J.L.Abu-Lughod, *Before European Hegemony*, Oxford University Press, New York, 1989.
- 29) 中村和之，前掲論文，参照。
- 30) 入間田宣夫編『中世奥羽の世界』東京大学出版会，1979年，参照。
- 31) 古厩忠夫，前掲論文，参照。
- 32) Abu-Lughod や Frank の理論を用いている。
- 33) 生田滋によれば，中国の政治の中心が西安から北京に移動したことは，中国とユーラシア西部との交易ルートが変化し，モンゴルや中国東北部との関係が緊密になったこと。また，これは中国の経済力が飛躍的に増大したことを示しているとする。大林，生田，前掲書，pp.142-143。
- 34) 世界システム下での，中核と辺境との関係は，中核部の勢力の強弱によって，辺境地域への国家支配の膨張や縮小が行われる。佐藤幸男「アジア地域国際関係の原像」（溝口，濱下編，前掲書，p.22）参照。
- 35) いわゆるウエスタン・インパクトではなく，19世紀までのヨーロッパ商人は，一応朝貢交易体制に参入する形でこの地域にやってきた。濱下は，近代の日本の中国に対する対応を，「脱亜入欧」ではなく，「容欧入亜」としているが，その後の歴史展開は，既存の冊封体制に対する，日本やヨーロッパの挑戦という振る舞いを見せているのは明らかである。濱下武志，前掲書，参照。
- 36) 安野眞幸，『港市論』日本エディタースクール，1992年，参照。